

# 南十字星

大阪大学外国語学部  
(旧大阪外国語大学)  
インドネシア語同窓会

2012年春 第14号

発行 南十字星会

連絡先 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402

電話 Fax 072-753-1693

Email rocky3@wombat.zaq.ne.jp

## 旧い思い出から 新たな取り組みへ

石川 恵二 ('62卒)



終戦後、大阪外専学生だった9歳年上の私の兄、欣也が家でインドネシア語の単語を連発するので、家族全員が terima kasih を覚えていた。内藤先生、中西先生、イスマイル・ナジール先生のお名前も、実は外大受験の前から私は知っていた。兄の同級生数名が家にお見えになり、将棋有段者の方からは将棋の解説をしていただいたこともあった。そんな訳で、私が外大願書提出の際、インドネシア語以外の選択肢は全くなかった。外大入学後も、大阪市立中学校教員をされていた同窓の先輩から家庭教師の口を紹介していただいた。大先輩諸氏に感謝の気持ちを抱きながらペンを執っている。

ちょうど半世紀前の1962年に卒業し入社した会社(兼松株)の配属先は木材部南洋材課であった。インドネシアの時代到来ということで、私が入社後、木材部門ではインドネシア語の学生を毎年のように採用した。私は3回、合計4年以上のマレーシア・サバ州(旧英領北ボルネオ)サンダカン駐在を経て、1971年末から1年間、ジャカルタ駐在員として赴任した。ジャカルタをベースに各地の木材積出港回りと商談のためのシンガポールへの出張があり、駐在員とは名ばかり、実態は動き回る長期出張員の立場であった。



ジャカルタ赴任前のスマトラの森林調査では、乗っていた小さなボートがインド洋にてエンジン故障で浸水、一晩動けなくなり、携行の食料、飲み物も油まみれで、翌朝、浜辺の住民から入手した椰子の実のうまかったことが思い出される。その後、黄疸で3週間入院という付録もついた。赤道直下の西カリマンタン・ポンティアナックでは、スピードボートで木材積出地点まで移動、木材積取船の海図でチェックすると赤道をまたいでいたことが判明した。スマトラのプカンバルからパダンへ車で移動した際には途中に赤道の標識があった(写真、現在は昔のような小さな標識ではなく、大きな赤道儀が建立されている模様)。結局、航空機を含めて陸海空で赤道を越えたことになる。

インドネシアの木材事情であるが、1960年代後半からの約10年間、原木の対日輸出量が急増した。それとともに、Masyarakat Perakayuan Indonesia (MPI = インドネシア木材協会) から日本木材輸入協会に対して2カ国会議開催の要求があり、輸入協会としてもMPIの要求に応じるようになった。日伊それぞれの代表が出席の本会議とは別に、ジャカルタでは、毎月、実務者レベルの作業部会があり、輸入協会ジャカルタ支部長の私が我が国の木材需給状況や価格動向を説明した時期もあった。

1975年、フィリピン、マレーシア・サバ州、インドネシアの木材供給国が同盟を結び、産油国 OPEC の木材版、所謂グリーン OPEC と言われた South East Asia Lumber Producers Association (SEALPA) を設立、国際会議の舞台は2カ国会議から4カ国会議へ移った。

2回目のジャカルタ駐在の1976年4月、マニラでの4カ国会議出席のため、私はジャカルタを出発したものの、4ヵ月前に罹ったマラリアが再発、途中のシンガポールで入院する羽目になった。マラリア原虫は同年12月、大阪でも暴れ出したが、東大熱帯疫学研究室の海



今、新しいことに取り組んでいる。幸い、我が横浜は一般市民にも国際貢献出来る道が

拓かれている。2002年日韓ワールドカップサッカー大会の際、私は横浜市の通訳案内ボランティア活動に参加、その翌年から、決勝戦会場であった横浜国際総合競技場(現・日産スタジアム)での見学者案内ボランティアをしている。

また、2002年のボランティア有志で結成の「よこはま2002」に入会した。会員二百数十名。語学対応の企画に関し、横浜市との折衝窓口を私が担当、会員との調整など結構忙しい身である。横浜市港湾局への飛び込み訪問が奏功した、外国客船乗客の案内・誘導活動は7年間続き、会の活動のコアとなっている(写真④)。

最近の活動の主なものに、2008年のアフリカ開発国際会議(TICAD IV)、2010年のAPEC、2011年の世界トライアスロン選手権大会(写真⑤=スイスの選手と)がある。いずれも会の活動実績が評価され、横浜市から指名されるまでになった。TICAD IVやAPECは半年前から準備にかかり、報道陣の取材も受ける。「語学はどこで習得?」の質問に「海外駐在と大阪外大インドネシア語卒」と答えると、堪能でなくても「得意の英語とインドネシア語」という私の紹介記事になる。

横浜でインドネシア人に出会うことが多い。外国客船のインドネシア人クルーは英語をしゃべり、表情にも余裕がある。12月のサッカーのクラブ

ワールドカップ選手権(トヨタカップ)観戦にインドネシアから来た家族連れ。そして、仲間同士の相部屋だが家賃が30万円以上の外国人対応の月ぎめ高級マンションに住むIT産業関係者たち…。随分驚かされる話だが、実際に私が見た現実のことである。インドネシア人も変わって来ているのだ。いつまでも過去の先入観にとらわれていてはいけないと、新しいインドネシア人の姿を見て、私は日々気持ちを新たにしている。

メランティ(ラワン)の巨木



老沢功先生のお陰で完治した。余談ではあるが、マラリアを体験した私には、高熱になる1~2時間前

に、今から体温が40度か41度になると言われたので、内外の入院先では関係者がその正確さに驚いた。

その後、南洋材を取り巻く環境は一変した。フィリピンは早い段階で原木輸出禁止に踏み切ったが、既に物理的に出すものがなくなっていた。やがてマレーシア・サバ州も資源が枯渇、同じような道をたどることとなる。開発のスタートが遅く余裕のあったインドネシアでも資源の有効活用を図り、付加価値を高める目的で、1985年末をもって原木の完全輸出禁止を実施した。日本の合板メーカーでは一時ロシア材に頼った時期もあったが、現在、原材料は過半が国産の杉やカラ松となっている。

インドネシアからの原木輸入が途絶え、私はインドネシアと無縁のラインに進むことになった。海外で病に倒れたことで「傷痍軍人」、赴任はすべて単身で、留守中に生まれた2人の娘と親子の初対面は1年後ということで「母子家庭」のレッテルも貼られた私の23年間の半生は終わった。しかし、その後も木材やインドネシアが常に私の心の中にあった。



寄稿

Apa &amp; siapa

## インドネシアとの関わり

増田 崇行 ('07 卒)

2007年卒業の増田崇行です。ついに寄稿の順番が回ってきました。専門商社の財務担当として働いており、現在はたまにインドネシア現地での資金調達の相談があるぐらい。それで私事ですが、これまでのインドネシアとの関わりについて書いてみたいと思います。

最初にインドネシアのことを意識したのは、小学1年生の時。インドネシア人の女の子の同級生がいて、私というよりも、その子と私の母親同士が仲良くなったようです。自宅近くに国営石油会社プルタミアの大阪駐在員用の社宅があり、そこから通っていました。ともかく、この出会いがきっかけで、母は「インドネシア人はいいい人」「インドネシアは必ずこれから成長する国」としきりに言うようになります。

インドネシアにすっかりはまった母は、関西インドネシア友好協会(関イ連)の会員になり、暫くすると自宅が協会の事務局に。私は関イ連ニュースの発送の宛名シールを貼ったりしていました。初めてインドネシアに行ったのは1992年、小学4年生の時、バリやジョグジャカルタに行きました。

進路を決めたのは、インドネシアを意識する環境が身近にあったこと、テレビで1998年のアジア通貨危機の際のデモや政権崩壊の様子を見て、その熱いエネルギーに感動したからです。このアジア通貨危機がきっかけで、京大、神戸

大、大阪大などのインドネシア人留学生が中心になって母国支援のためのチャリティーコンサートが行われ、その手伝いをしました。また、留学生との交流のほか、領事館主催の式典に呼ばれることもありました。



ポロブトゥール遺跡を訪れた時の記念写真



南十字星会の総会受け付けで。左端が筆者

て、留学することになりました。留学先は、Universitas Negeri Yogyakarta (UNY)。有名なガジャマダ大学の隣にある旧教育大学で、規模は小さく、日本人留学生も私1人、外国人用の語学プログラムはなし、といった環境です。でも、通常の授業に出て語学の向上はできたと思います。ダルマシスワは大学を選べないことが難点ですが、世界中から集められた留学生との交流、インドネシアのことが好きな人が世界中にいるということを認識させてくれ、共通使用語が当初は英語だったのが、1年経ってインドネシア語に変わったのは、ちょっとした感動でした。留学は2005年8月まで。最後の1カ月は、ジャカルタで高岡先輩のご支援もあり

マンガ教室でインターン経験をしましたし、アチェの地震の際は、先生方にご心配いただきました。

卒業・就職後は、里先輩のご紹介で、南十字星会の幹事メンバーに入り、主に会の財産である名簿の管理を行いました。山口前会長、岩谷さん、宮崎現会長といった方々が同窓会のあり方

を議論し、行事の実行、ユニークで特徴ある会報の発行、HPの開設、2年に1度の総会等々行っていることで、素晴らしい組織になっていると思います。転勤で関東支部に移ってからも名簿係のお手伝い。より完全を目指していますので、引越等転居される方は、お知らせください。

今後もいろいろな出会いに感謝しつつ、熱いインドネシアと関わっていきたいと思います。



## キャンパス便り

准教授 原 真由子

(外国語学部インドネシア語専攻担当教員)

### 語劇祭

今年度も、豊中キャンパスの学園祭「まちかね祭」に合わせて、箕面キャンパスで語劇祭が11月4日、5日に行われました。インドネシア語専攻は、2年生が中心となり、「Bapak」「父」という、インドネシア独立戦争を背景とした劇を上演しました。独立派の父と親オランダ派の息子の間にある政治的な考えの対立とそれと一致しない親子の心情のもつれを描いており、最後には父が息子を撃ち殺すという悲劇です。

登場人物は、主役の父親と息子、妹とその婚約者と少人数であるため、1人当たりの台詞の多さと長さはかなりのものでした。また、恒例となりつつありますが、女子学生が男役を演じるということで、声色や姿勢な



どを工夫しなければなりません。さらに、歴史的な背景を理解し、登場人物に感情移入ができるようになったのは、本番間近でしたが、最終的には本人たちも自信をもって上演できたようです。それには、台本、字幕、音楽や照明などの裏方の役割も大きく、部分的には先輩や後輩の力も借りながら皆力を合わせて語劇をやり遂げることができたと思います。

### スピーチコンテスト

インドネシア語のスピーチコンテストが2カ所で開催され、インドネシア語専攻の学生は両方に参加しました。まず、11月19日に神田外語大学主催のコンテストで、グループA(インドネシア語学習歴2年以内の大学生)の部に2年生の宮本有紀子さんが参加しました。彼女は、農業におけるインドネシアと日本の技術・人材交流をテーマにスピーチを行い、グループ1位を獲得しました。



がいくつか課題詩として用意されており、その中から選びます。暗記できたとしても、詩のメッセージやニュアンスをくみとり、さらにそれを朗唱で表現するというのは容易ではなく、スピーチ以上の難しさがあるかもしれません。結果は、「Pencuri Hati」(Nina Karmila 作)を読んだ2年生の佐藤温子さんが優勝し、1年生の西村美咲さんが「Nyanyian Sore」(Acep Zamzam Noor 作)を読み、2位を受賞しました(写真)。

もう一つは、11月20日に南山大学で開催されました。このコンテストは、詩の暗唱部門とスピーチ部門の2部に分かれており、詩の暗唱部門には1年生4人、2年生1人が、スピーチ部門には2年生1人が参加しました。詩はインドネシアで既に発表されている作品

参加者は、主にインドネシア人教員のサフィトリ先生によるご指導のもと、何度もインドネシア語の原稿を書き直したり、スピーチや詩の暗唱の練習を繰り返し、授業だけでは得られないインドネシア語能力の向上が見られたと思います。

### サザンクロス講演会

1月25日に、オランダ王立言語文化研究所(KITLV)のWillem van der Molen先生(現在東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所客員教授)をお迎えし、サザンクロス講演会を開催しました。講演は、「西洋世界のジャワへの進入:1867年のジャワの物語」と題し、ジャンル、媒体、匿名性など様々な点において当時インドネシアでまだ珍しかった、個人的な体験や知識を記述した書物を事例とし、筆者であるジャワ人が新たにもたらされたオランダの文化や技術をどのように見

聞きし、理解したのかをいくつかの観点から解釈を試みるというものでした。Molen先生は、時間が足りなくなるほど熱心に議論を展開され、いろいろな分野に関する興味深い示唆を与えてくださいました。

その後の懇親会でも、学生と和やかに交流され、学生にとっても視野を広げる良い機会となりました。



教員の現在の研究から

## ワヤンを基にしたコミック

准教授 福岡 まどか

教員の現地調査の内容や授業で扱っているテーマなどを紹介していきます(順不同)。今号が第1回です。

インドネシアの代表的芸能の1つとして知られているものにワヤンと呼ばれる芸能があります。ワヤンについては、すでにこの会報でも少しご紹介したことがあります。ここではワヤンをもとにして描かれたコミックをご紹介したいと思います。

ワヤンの中では、様々な物語を上演します。もっともよく知られているのは古代インドの叙事詩マハーバータとラーマヤナです。どちらも壮大な物語で、登場人物の人間関係もかなり複雑です。ジャワ島に滞在していた時に何度もワヤンを観ましたが、いつも物語の一部分を上演するのみで、物語の全体を上演するという形態はありませんでした。私は、現地の人々が一体どうやって壮大な物語の全体像を把握しているのか?という点に、非常に興味を持ちました。現地で親しくなった何人かの芸術家にこの点を訊いてみると、意外にも物語をコミックから知ったという人が多かったのです。これをきっかけに私もワヤンのコミックに関心を持つようになりました。

大体1960年代から70年代くらいにかけて、ジャワ島やバリ島でこのコミックが流行っていたようです。現在60代から70代くらいの方々は子どもの時にこのコミックを夢中で読んだという話をしてくれました。漫画家は何人かいましたが、もっともよく知られているのがR.A.コサシさん(1919年生まれ)というボゴール出身の男性漫画家です。私は2008年にバンテン州セランにあるコサシさんの家を訪ねました。当時89歳のご高齢でしたが、コサシさんはとてもお元気でいろいろな話をしてくれました。コサシさんは1950年代の終わり頃からワヤンの物語をもとにしたコミックを描き始めたそうです。子どもの頃からコミックに興味を持ち絵も好きだったとのこと。現在では想像しにくいですが、当時のインドネシアではテレビなどの普及率も低く、画像のメディアは非常に限られていたと推測されます。そうした中でコサシさんの描いたコミックは多くの人々を魅了してきました。

このコミックを数年前にインドネシア語科の学生たちと一緒に授業の中で読んでみたことがあります。その時に感じたこのコミックの最大の特徴は、いわゆる地語りに相当する説明文が非常に多いということです。



①叙事詩ラーマヤナのコミックより。シーター姫の婿選びで弓を射るラーマ(Kosasih 1975:44-45)  
②2008年3月、コサシさんの自宅でインタビューの筆者

吹き出しの台詞よりも状況を説明するナレーションの方が多くの比率を占めています。どちらかというコミックというより絵のついた物語という感じです。手書きのインドネシア語を読み取るのは思いのほか大変な作業で、学生たちも苦労しつつ読んでいました。

インドネシアの日刊新聞「コンパス」に「パシコムおじさん」という4コマ漫画を連載している漫画家のスダルタ(1944年生まれ)さんも、コサシさんのコミックの愛読者だったそうです。スダルタさんによれば、コサシさんのコミックの画像としての魅力は、登場人物のスタイルが美しいこと、それでいて西洋人の風貌ではなくアジア人的人物像であること、躍動感のある画像が多いこと、などだそうです。西ジャワ出身のコサシさんは影絵よりは人形劇や舞踊劇に親しんだようで、画像の中の登場人物の衣装や風貌も舞踊劇などの影響がより強く見られます。伝統芸能と大衆文化が関連し合っていた当時の様子がかがわれます。

一方で物語としての魅力は、インドの叙事詩を忠実に描いていること、登場人物の高潔な姿がクローズアップされていること、また子どもが読者であることに配慮して難解な部分も分かり易く描いてあること、などが挙げられます。

現在このコミックは、バリ島の書店などで多く見受けられます。インドの叙事詩が題材であるということが、バリ島で多く売られている理由かと思えます。

ちなみに外大時代インドネシア語の先生だったアイップ・ロシディ先生は、コミックよりは書物やお祖父さまからの話などで物語や登場人物についての情報や知識を得ていたとのことでした。

\*このテーマに関する論文は、「インドネシアにおけるラーマヤナ物語の再解釈-R.A.コサシのコミックを事例として」、『東南アジア-歴史と文化-』No.38:106-140, 2009年に書かれています。



## 切に願う道徳心の向上

中田 梢 ('03卒)

インドネシアに移り住み6年。たった6年の間にジャカルタ市内や近所周辺は大きく様変わりした。ジャカルタから車で2時間程の近所周辺は、昨年からは商業施設開発が進み、様々な外資系の大手スーパーやファーストフードの店が次々に開店、朝から晩まで大勢の人達で賑わっている。地価は6年前に比べ2倍以上になっており、値上がりは止まることを知らない。ある時の日本のバブル期の様を呈している。ジャカルタではあちこちの商業複合施設に欧米系コーヒーショップが入店し、数年経った今はどこも商談やお喋り、暇潰しのインドネシア人で溢れ、座る椅子がなく諦めてコーヒーを持ち帰ることもしばしば。Bakso や Nasi gorengのような国民食の3倍以上する価格のコーヒーがインドネシアで受け入れられるだろうかと欧米人しか客がいなかった当初は疑問に思った。が、今ではインドネシア人達で連日満員御礼の状況だ。

コーヒーの香りは経済発展の香りとも言うが、最近コーヒーショップに行く度にこれに頷く。10年前の留学時はコーヒーショップを探すのにひと苦労。どうしても



もコーヒーが飲みたくなった時は近場の上澄みコーヒーでしのぎ、美味しいコーヒーが直ぐに飲める日本を恋しく感じた。週末の時間潰しはショッピングモールツアー。ジャカルタ市内にはSOGOを含む10以上の大ショッピングモールが出来、子供たちを遊ばせたければ屋内遊園地併設のモールへ、大人が買い物をしたければ有名ブランドショップが数多く入っているモールへ(写真は、ジャカルタの風景⑧とジェットコースターもあるショッピングモール)。週末の高価なブランドショップはインドネシア人の奥様達で賑わう。

2人の子供たちと一緒に



2011年にインドネシアは東南アジアトップの自動車販売数を記録した。同年の経済成長率は実績6.5%、2012年は欧米の景気減退で予測を

下方修正したもののそれでも6.2%を見込むという。大手格付け会社が投資適格級にインドネシアを格上げした今、2013年以降は成長率が再び加速するというから、このインドネシアの勢いはまだまだ続くのだろう。

インドネシアの日々目に見える加速した経済成長を嬉しく思う傍ら、その嬉しさをそぎおろす事象がある。それはインドネシア人の道徳心の欠如。ユドヨノが汚

職撲滅撤廃を掲げ、汚職撲滅委員会を立ち上げて様々な摘発を行ってきたはいるものの、まだまだ中央政府要人のレベルに限られた世界の話となっており、ユドヨノ大統領のその意気込みはまだ各省庁や地域に伝わっておらずこれらの政府役人汚職撲滅意識は甚だしく低い。



た税関の庁舎ロビーでは「no tipping」を大々的に掲げながら、イスラム教断食明け大祭が近づいてくると、役所の長自身が「書類点検に時間がかかる。断食明け大祭が近いからな...」と、書類へのサインと引き換えにサインを

税関に「賄賂お断り」の表示はあるが...



を求める会社から“ボーナス”が欲しいことを示唆する。

積載超過の明ら

かなトラックが警察官の前を通過しても、警察は見ても見ぬふり。これはトラック会社が「見逃し謝礼金」として月極めでいくらかを警察・地域に支払っており、その見返りに特別ステッカーを受けるから。そしてステッカーが貼ってあるトラックには、警察も地域住民も注意・罰則はしないことになっている。知事選挙等の講演会に行けば、そこで渡されるランチ box にはお金が入って

いるのは当たり前、というには流石に驚く。選挙講演会には政治のことなどわかっているのだろうかと思ふ。首を傾げるような、裸足の人達や乳飲み子・子供をたくさん連れた主婦らで溢れかえっているのを見れば、状況が理解出来る。そんなことを公務員が公然と行い私腹を肥やしているの、市民の中には機会さえあれば自分もと平気で行ってしまう感がある。

本来、物理的には1人1枚しか作れないIDカードを偽造して何枚も所有し状況に応じて有利なカードを使い分ける人が驚くほど普通に多いこと。私も「Rp.300,000で作ってやるがどうか」と、居住地の security に offer されたことがある。民事裁判では、誰からみても悪い方は明らかであっても、裁判員に多くお金を積んだ方が裁判では勝訴することもよく起きているという。

皆がその不正を知っていても告発する人はいない。仕返しが怖くて出来ないというのもあるだろう。確かに逆恨みから発生する事件はよく聞く。もしくは不正が日々の日常となっており、疑問視する目がマヒしているというの少しあるのかも知れない。

インドネシアでは1-2時間車が動けなくなるような車の渋滞が日常茶飯事に発生する(写真⑥)。皆が規律ある行動を取れば本来渋滞が発生するはずのないところでも、反対車線を割って入ったりする。驚くほどの数の人間が平気で無理をするので、両車線で身動きが取れなくなり、警察官が交通整理に来るまでひたすら待つことになってしまうのである。「人のことなど考えず、自分さえよければ」という考えで行動しているのではないだろうか。このとばかりで出勤時間や商談待ち合わせに、大幅に遅れるということをししばしば経験した。

親の躰が期待できないのなら、幼少期の学校教育で物事の善悪、道徳心の教育を取り入れてはどうだろうか。日本人や外国人の道徳心が素晴らしいと言うつもりは毛頭ない(そうも言えないのだ)。インドネシアは私の“第二の母国”であり、強い愛情を寄せている。それだけに、このような日常の中でのあまりにも多い道徳心の欠如による行動、それによって被害を受ける人達がいることには深い悲しを感じる。道徳心ある人たちの行動を妨げ、インドネシア自国の発展を妨げている。

自分の勤める会社に入社した新入社員に先日「なぜ日



系を選択したのか」尋ねたところ、彼はきっぱりと「自分の居住地域に対して行った日系企業の慈善活動(CSR活動)に感銘したからです」。外資企業の進出で、企業活動を含む海外の文化がインドネシア人にとってより一層身近になった。そこから「良き部分を感じ取り、自らの行動に繋げる」インドネシア人が確かにいることを実感した。

私は今、管轄する部署の数十人のインドネシア人スタッフの指導にあっているが、彼らに会社(外資系会社)を通じて、私を通じて何かを感じ取ってもらえることが出来たら、そしてそれが子供へ、周囲へと波及していくことが出来たら“これハナマルなのかな”と思う。

そういった意味では外資系の担う役割、私を含む外国人達の責任は大きなものであり、常に責任ある行動と発言を続けていかねばならないと嘯みしめる。親愛なるインドネシアが経済発展とともに道徳心も成長し、来る将来に更なる大きな発展を遂げることを強く願う。

寄稿

Apa &amp; siapa

## 身近になりつつある インドネシア投資

中岡 和也 ('94 卒)

私は現在、ある銀行の営業店にてリテール（個人向け）営業の管理者をしております。大阪外大を卒業後、長年インドネシアとは縁遠い生活を送っていましたが、最近職場でインドネシアに触れる機会が増えてきましたので、その辺りを紹介させていただきます。

このところ、インドネシアに個人の投資マネーが流入している状況を皆さんはご存知でしょうか。私の身近なところで例を申し上げますと、職場で取り扱っている投資信託が 85 ファンドあり、その 15%にあたる 13 ファンドがインドネシアへの投資に関連したものとなっています。一昔前インドネシアといえば、対外債務問題や為替急落などで財政支援を受けるイメージが強く、とても個人レベルで投資することは考えられませんでした。最近では同国の良好なファンダメンタルズ（基礎的諸条件）により安定した経済成長を遂げ、2011年12月に米大手格付会社フィッチがインドネシアの長期債務格付を BB プラスから BBB マイナスに格上げし、また今年1月にはムーディーズがインドネシアの格付引き上げに追随したことから状況は一変してきています。

一般的に資産運用の世界では、BBB マイナス以上が投資適格級とされ、BB プラス以下とは天と地の差があると言われていました。そのいい例がブラジルであり、2008年に BBB 格を取得した頃から、中国やインドと並び経済新興国として存在感を高めています。皆さまの中にも、こういう新興国投資に興じられている方がおられるのではないのでしょうか。

実際の営業店では、インドネシアがどういう国か想像もつかない営業マン、顧客双方が運用レポートやファンド資料を見ながら、いわばバーチャルな世界であ



近況写真。妻と吉野山で

れこれ話が進められています。結果としてそういう情報だけでは、話が硬直的になり実感できないままで終わってしまうことがよくあります。そこで外大卒業生として恥をかかない程度で、在学中に学んだことや実際現地で見聞きしたことを織り交ぜて話にすると、意外にもインドネシア投資に関心を寄せる同僚や顧客が多いことに気が付きます。

話題に出すテーマの1つに、東南アジア通貨危機時に起こったルピア暴落下の経済状況が挙げられます。私が外大卒業後、インドネシアと直接関わる機会があったのがちょうどこの時期であり、1年足らずの sebentar でしたが、以前勤めていた銀行の研修生制度を利用してジャカルタに滞在する機会がありました。

赴任当初の1997年7月頃は1米ドル=2,500ルピア前後でしたが、日に日にルピア安の様相が強くなり、翌1998年1月には一挙に1米ドル=12,900ルピアに達しました。ここまでの話だと過去の経済データの披露で終わってしまうのですが、この間に起こった金融波乱 物価高騰 民衆と軍との衝突 政権交代

民主化といった流れで当時の見聞を振り返ると、今は15年前と比べて随分変わった印象を、私自身が強く感じます。また、興味を持って話を聞いていた同僚や顧客の中にも今後のインドネシア投資の妙味を感じ取られる方が多いのも事実です。

今の職場がせんちゅうパル（北大阪急行・千里中央駅上）内にあり、在学中によく乗車した阪急バスを見かけると20年前のキャンパスライフを懐かしく思うことがあります。南十字星に投稿させていただいたのも何かの縁を感じますし、もし小生を見られることがございましたらお気軽にお声かけ下さい。

（カットのパンフレットコピーは、投資信託・インドネシア債券オープン運用レポートの一部）



寄稿・提言

## 「躍進」と定員の問題

宮崎 衛夫 ('65 卒) =南十字星会会長



1997/1998 年のアジア通貨危機に端を發した経済の崩壊・政治の混乱の嵐の中、スハルト政権が倒れ、以後 3 人の大統領による不安定な短期政権が続いた。徐々に落ち着きを取り戻したのは、初の直接選挙によりユドヨノ大統領が誕生した 2004 年以降である。この間、ユドヨノ大統領は政治の安定、経済の発展に注力し、いくつかの課題を抱えつつも、成果が着実に現れてきている。特に、昨今のインドネシアの躍進振りには目を見張るものがある。私たちインドネシア語を専攻し、またインドネシア大好き人間としては誠に嬉しい限りである。

ここで、インドネシアの実力、日本との関係の重要性などを列挙してみたい。まず、インドネシアは ASEAN のリーダー的存在、G20 の一員、イスラム最大の民主主義国家、そして世界第 4 位の人口を誇る国である。経済成長も順調で、国民総生産 (GDP) は購買力平価ベースで世界 15 位。中間所得層の拡大により日系企業にとっても魅力の国内マーケットも順調に成長している。例えば、車の販売台数で ASEAN トップになったことなどは、最近の新聞紙上にも頻繁に紹介されている。インドネシアが日本にとり如何に重要な国であるかは、日本からの ODA (政府開発援助) が 1966 年～2010 年の累積で、トップであるということからも容易に知ることができる。

日本人ビジネスマンの多い国として世界で 10 位。また、格付け機関がインドネシアを投資適格としたニュースも、今後の投資に弾みをつけることになる。

単に経済の側面からだけでなく、穏やかなイスラム社会、豊かなジャワ文化、バリ・ヒンズー文化などに代表されるように歴史・文化的にも興味尽きない国である。

このようなインドネシアの重要性を鑑みると、今後インドネシア語専攻の卒業生に対する期待は大きく、また活躍できる場も拡大していくことは明らかである。大阪大学との統合後のインドネシア語専攻の入学定員が 10 人で、24 言語中で一番少ないというのは、どうしても理解できないと思うのは私だけだろうか。

大学の重要な使命は、社会のニーズに応えるべく有能な人材を育てることである。大阪外国語大学時代に毎年 20 人を超す卒業生を世に送り出し、経済界をはじめ多岐にわたる分野で活躍する多くの OB・OG 達に思いを馳せると、現状の定員の少なさは何とも残念である。大学当局にインドネシア語専攻の定員増強を切に願いたい。そしてインドネシア語を学んだ学生諸子から、社会で有為の士が多く巣立っていくことを期待したい。

### URL 変わりました!!

「南十字星会」の Web サイトを、2011

年 12 月から Jimdo 社の無料サービスに切り替えました。新しい URL は <http://bintangpari.jimdo.com> です。突然の引っ越しで、多くの人に迷惑をかけました。

プロバイダーを今回 Jimdo(ジンドゥ)社に変更したのは、専門的な知識がなくても手軽にホームページの編集ができ、記事更新も比較的簡単だからです。Jimdo はドイツ発のベンチャー企業です。日本では KDDI と提携して 09 年に始動しました。従来南十字星会のサイトは HTML と CSS を基にした、一応本格的なものと“自負”しておりました。ただ、編集作業がいくらか複雑なのが難点でした。

この切り替えにともなって、サイトは複数幹事の「共同編



集体制」にしました。担当者がパスワードで編集ページを開き、各自責任をもって記事更新していただくのです。

もともと Jimdo は「みんなです」とい

う意味のようです。ドイツ語の Jim は英語の James に当たるポピラーな名。これに「みんな」の意味を持たせ、英語の do を加えた合成語ともいわれています。

## 特別寄稿

## Apa &amp; siapa

## Menemukan Indonesia di Jepang

Teguh Setia Anugeraha

(大学院修士 修了'10)



初めての日本は2002年10月でした。文部科学省の奨学金で、まず大阪教育大学に留学。日本人の友達が出来たり、日本語や日本文化を学べ、実際に体験したりすることが出来て、とても貴重な1年でした。しかし、大阪教育大学で学ぶインドネシア人はたった1人。留学が初めての私は、その1年の間に両親に会いたくて寂しい時がありました。また、イスラム教徒として、

食事の制限がありますが、料理が出来ず、インドネシアの料理を食べたくて早く帰国したいと思う時もありました。

2008年に結婚してから、大阪大学(箕面キャンパス/旧大阪外国語大学)言語文化研究科言語社会専攻に進学しました。大阪大学に留学しているインドネシア

人はたくさんいて、よく「集まり会」を行っています。集まり会には、インドネシア料理の食事会、運動会や勉強会などがあります。そこで、先輩から、Halal(イスラム教徒が食べられる)食品はど

こで購入すればいいか、いろいろなことを教えてもらえました。集まりはお互いの相談をしたり、情報を交換したりする場所にもなります。おかげで、私はインドネシアの料理も作ることができ、留学している間は寂しくなくなりました。

インドネシア人留学生の活動の中に「Osaka Angklung Club」というサークルがあります。竹からできたアンクルンという楽器を演奏するサークルです。妻と一緒にこのサークルにも入りました。妻はアンクルンをやって、私はマネージャーをしています。留学生音楽フェスティバル、祭り、交流会、チャリティー



クラブ仲間のアンクルン演奏

イベントなど、いろいろなイベントで演奏しました。そこで、いろいろな人に巡り会えて、交流することによって、沢山の経験や知識を得ました。

日本で、料理や音楽を通じてインドネシアの文化をより深く習うことが出来るとは、思ってもいませんでした。

大阪にはインドネシアの文化に興味をもつ日本人が行っている「ラグラグ会」や「ガムランクラブ」「インドネシア語の勉強会」などがあります。すべてインドネシア人の友達から聞いて初めて知りました。

こういった日本の人たちと一緒に、馴染みのあるインドネシアの文化や習慣などを行うことが出来て、日本での生活もけっこう楽しく、自分は恵まれた環境にいるなあと思うようになりました。

日本で生まれた子供はすでに2歳(写真⑥)。今年の4月から日本の企業で働くことになりました。今は心配することがなく、新たなスタートです。

Dengan adanya pertemuan dengan teman-teman orang Indonesia di Osaka, adanya kegiatan budaya Indonesia, bisa makan masakan Indonesia bersama-sama, saya dan keluarga tidak merasa kesepian dan jauh dari kampung halaman.

Begitulah saya merasa menemukan Indonesia di Jepang. Saya merasa menemukan tempat yang akrab dengan kehidupan saya di Indonesia, sehingga saya merasa betah hidup di Jepang.

Bagi saya, bisa melebur dengan kebiasaan orang Jepang sangatlah penting, tapi bergaul dengan orang sebangsa juga tidak kalah pentingnya, karena bisa saling bertukar informasi, dan saling membantu, sehingga bisa hidup di Jepang dengan lebih menyenangkan.

# サザンクロス懇話会

～第4回～インドネシア伝統漁  
「サシと海からの贈り物」



「第4回サザンクロス懇話会」(南十字星会主催)が2011年12月10日、大阪大学中之島センター会議室で開かれました。インドネシア・マルク海に浮かぶ小さなハルク島の「不思議な大漁」と「村の掟」がテーマ。桃山学院大学講師の鈴木隆史さんに講演していただきました。講演は手づくりDVDに説明が入る形で進められ、映像を見ながら“驚く”ことになりました。(参加者23人)

ハルク島の人口は約2000人。イワシの仲間でロンバという魚が年に1度、10～11月にかけて海から膨大な群れとなって島の川に遡上する時があります。ヤマ場はその解禁の様子。魚はピチピチ跳ねるところか、宙を飛ばす。川は歓声と笑顔です。詰めかけた村人の



騒ぎにつられてか、魚の方も興奮。捕獲を逃れようとして凄いジャンプ力を見せるのかもしれませんが、

村ではいろいろ決まりごとがあり、掟

を破れば罰を加える取り締まり組織もできています。「海からの贈り物」のロンバ漁についても同様です。現地語で sasi は禁止の意味。解禁はブカサシ(buka



宙を飛び跳ねるロンバの大群

sasi)とって、大忙しの1日となります。貴重なタンパク源の保存食として、捕獲したあとすぐ乾燥作業にもかかるのです。この



村人が総出で収穫 みんな笑顔

日のために帰郷する人もいて、ロンバは村人を結び絆の役目も果たしていました。

講演の前段では、掟のシーンやハルク島の自然、風景、生活ぶりを伝える映像と解説が流れました。インドネシアは「研究テーマの宝庫」といわれています。でも、行政機構の変化で新しい法律が適用され、このサシも消えつつあるそうです。

インドネシア語で lompat という語は「跳ぶ、ジャンプする」という意味ですが、これと現地語の「魚のロンバ」が繋がっているのかどうか。質疑応答では活発な意見が出ました。

## 消息

## ひとこと (敬称略)

池永義啓(41卒)=札幌市

当地に住みついて半世紀、自然を友に四季の移り変わりを楽しんでます。

小藤 保(41卒)=兵庫県西宮市

ますますのご発展・世界でのご活躍を祈念いたします。

石川欣也(49卒)=奈良県大和郡山市

いつもありがとうございます。貧者の一灯いつまでつづきますやら。

長谷泰行(50卒)=大阪府箕面市

44年間勤めた信友(株)(名古屋)にてインドネシアには関係ないパキスタン、イラン、イラク、タイ等で青春時代を送りました。今年度よりOB会会長。最後のご奉公、感慨深い昨今です。

奥田忠志(50卒)=兵庫県西宮市

サンデー毎日の生活を楽しんでます。

山口 寛(58卒)=大阪府枚方市

アジアの新興国として脚光を浴びつつあるインドネシア。半世紀近くにも及ぶタイ国との係わりと合わせ、母校を介し

ての終生のつながりを大切にしたいと思っております。

前田正一(59卒)=神奈川県鎌倉市

環境関連で必要に応じ少し手伝いも。

畑仕事などで元気にしています。

道広健吾(61卒)=東京都大田区

いよいよ来年は後期(高貴ではありません)高齢者の仲間入り。毎日数種の薬を服用しながらも何とか無事に過ごしたいと念じております。

山下 進(61卒)=京都府宇治市

毎回、それぞれのインドネシアに感銘!自身の現役時代と重ね、楽しく読ませていただいております。

堀田 実(63卒)=千葉県船橋市

釣りのボランティア活動が多くなり、日程の調整に追われています。

山下勝男(66卒)=埼玉県さいたま市

平成23年7月に古希を迎えることができました。会員諸兄のご健勝を祈ります。

勝原紀美代(75卒)=広島県山県郡

インドネシア人介護福祉士候補生の勉強のお手伝いをしています。

勝田英紀(82卒)=大阪市東淀川区

近畿大学経営学部で「貿易実務」を教えています。

亀山理恵子(96卒)=大阪府堺市

いつも会報ありがとうございます。

おくやみ申し上げます

高嶋覺保(51卒)=大阪市 2010年3月

「長らくお世話になりました」(長女)

太田邦雄(56卒)=愛知県 10年11月

「永眠をお知らせします」(奥様)

土山宏二(56卒)=寝屋川市 11年4月

「語科は楽しかったようです」(遺族)

向井七男也(57卒)=静岡県 11年9月

植田 喬(58卒)=奈良県 11年5月

森本 洋(58卒)=京都府 11年11月

福島 恒(58卒)=堺市 11年12月

辻 智司(62卒)=千葉県 12年1月